

中部の

エネルギーを
築いた

人々

名古屋の事業王 奥田正香と
名古屋電力・名古屋瓦斯の創設

奥田正香は明治期の名古屋を代表する実業家である。名古屋商業会議所の会頭を20年間務め、新規事業を次々に起こし、名古屋の経済発展に貢献した。名古屋電力、名古屋瓦斯の創設など、エネルギー産業にも大きな足跡を残したが、大正2年10月、政財界を揺るがせた稲永事件に関連して実業界を引退した。



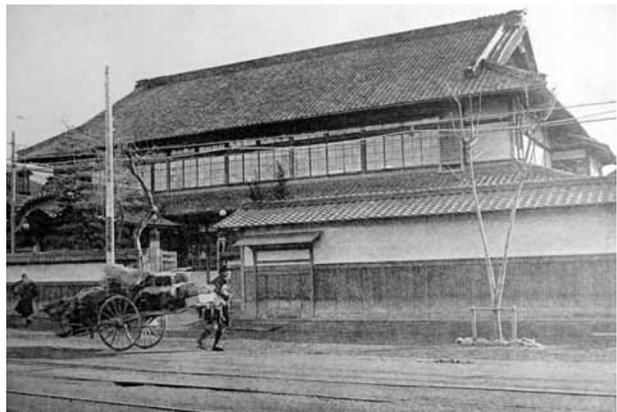
奥田正香

奥田の生涯と事業

奥田は弘化4(1847)年3月、尾張藩士奥田主馬の子として名古屋に生まれた。維新の際は尾張藩勤王派丹羽賢に従って国事に奔走、その功により賞典禄90石を賜った。明治3年愛知県史生、4年三重県権大属、5年上京して司法省に入ったが、辞して帰郷、7年から幡豆郡小栗新田地先の海岸埋立事業(奥田新田)に着手し140余町歩の開墾をなし遂げた。明治13年10月に県会議員、同14年2月には名古屋区会議員に当選、各々議長も務めた。

その後実業界に進出し、明治20年6月には尾張紡績を創設して社長となり、26年7月に名古屋商業会議所会頭、同12月に名古屋株式取引所理事長に就任した。日清戦争後29年7月には日本車輛製造を設立して社長となり、同8月には名古屋3大銀行の1つ、明治銀行を創設して頭取に就任した。日露戦後に事業熱が高まると、39年に

名古屋電力・名古屋瓦斯を創設、愛知・三重両県下の紡績会社を合同して三重紡績を創設(38年10月)し、40年1月同社社長に就任、大正元年には朝鮮開発の目的を以て朝鮮起業株を創設し社長となった。また、愛知県知事深野一三、名古屋市長加藤重三郎と親密な関係(三角同盟)を築き、奥田の息のかからぬ事業は名古屋では成り立たないといわれた。奥田は、事業創設して利益を得るのに熱心で育て



名古屋商業会議所(出典：『愛知県写真帖』)

ることに意を注がないとか、態度が傲慢であると眉を顰める人もいたが、時代の変化を読み取り新規事業を次々立ち上げ、名古屋に欠けていた外部資本の導入や外部の人材登用など、名古屋の経済・産業の発展に貢献し、明治44年藍綬褒章下賜、没後正六位に叙せられた。

以下、奥田の電気事業・ガス事業との関わりについて述べる。



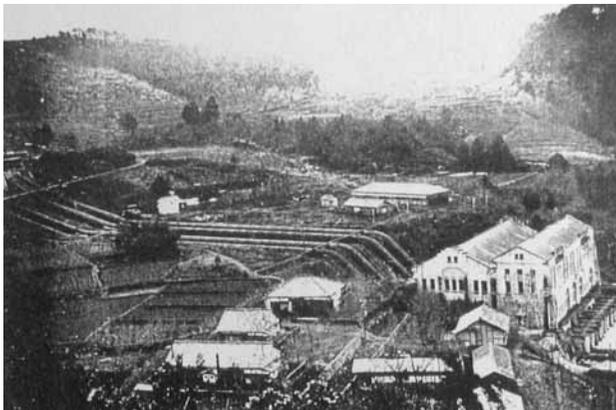
奥田正香墓銘碑
名古屋市立八事霊園

名古屋電力の創設

明治20年、名古屋電灯創設に際して奥田は
発起人に名前を連ね(後に脱退)、尾張紡績で

は名古屋電灯に先駆けて自家用電灯を灯した
(明治22年)。明治39年10月、名古屋が産炭地
から遠く工業用動力源の石炭が割高なことを憂い、木曾川八百
津に水力発電所を設けて、名古屋地区工場への動力供給を目ざ
して名古屋電力を設立(資本：500万円)し、社長に就任した。
しかし、日露戦後の不況下で資金調達に苦しみ、また工事が難
航し予想外の出費が高んだため、明治43年10月名古屋電灯と合併
した。

名古屋電力の建設した八百津発電所



名古屋瓦斯(現東邦ガス)の創設

名古屋のガス事業は日清戦争後山田才吉等
によって計画され、知事の許可も得ていたが、
戦後不況で事業化できないまま
に過ぎていた。日露戦後、明治
39年11月、奥田はこれを引継い
で名古屋瓦斯を設立(資本：200
万円)して社長となった。技師
長には後に社長となる岡本桜を
技師長に抜擢し、本社を市内大
津町に、工場を御器所村字高縄
手に設けた。ガス事業が有望だ
とわかると、豊橋、浜松、一宮、
知多など各地にガス会社を創設

し、奥田はこれら4社等で社長を務めた。

(浅野伸一)



名古屋瓦斯 本社(出典：『社史 東邦瓦斯株式会社』)